

西田 隆政

文章・談話研究は、表現学会の研究分野の中でも重要な位置を占めるものといえよう。近年は、言語学研究でのテキスト研究の名称という使用されることが多くなりつつあるが、伝統的な文章研究での作品の言語を丁寧に読解していくという手法の重要性は変るものではない。

とりわけ、日本語の古典作品の文章研究において、それは研究の基礎ともなるものであり、その部分がないがしろであれば、研究そのものの信頼性が損なわれることにもなる。

その意味で、2018年での代表的な成果として、山口佳紀『伊勢物語を読み解く

表現分析に基づく新解釈の試み』(三省堂、2018年2月)と高橋亨・辻良和編『栄花物語 歴史からの奪還』(森話社、2018年10月)を取り上げたい。

『伊勢物語を読み解く 表現解析に基づく新解釈の試み』は、その書名からも明らかなように、「表現解析」が研究上の鍵となっている。「あとがき」には次のように述べられている。「今回は、『伊勢物語』の各章段にどのようなことが書いてあるかを明らかにしようというのが目的である」(p.388)と。

しかし、山口は「この本に取り上げた問題そのものに決着がついたとは思っていない」(p.339)と言いきる。『伊勢物語』という作品をより深く理解するためにも、ここでの数々の提言を我々は再検討すべきであろう。

『栄花物語 歴史からの奪還』は、「歴

史」でも「物語」でもある『栄花物語』を、一つの物語作品という観点から、より深く読解することを試みた11の論考をまとめたものである。まさに、書名の通りであり、「あとがき」には「いったん歴史書であることを念頭から消す」(p.261)とする。

しかし、『栄花物語』に記述されているのは「歴史」とされる「事実」であり、そのことは常に読解の際についてまわる。この点を考えるにあたっては、同じく「事実」を題材とする「日記作品」と比較するのが、一つの方法であろう。

本書所収の山下太郎『『栄花物語・初花』の〈語り手女房〉語り換えの方法』(pp.179-199)では、初花巻で援用された『紫式部日記』や『更級日記』の「語り」が『栄花物語』の叙述に合う形に変換されたことを指摘する。「語り手」の「語り」によって題材が作品内で展開するという点では、「歴史物語」も「日記」も同様であり、ここに『栄花物語』を読み解く上での突破口があるやもと考えられる。

また、2018年には、糸井通浩『「語り」の言説の研究』(和泉書院)、同『古代文学言語の研究』(和泉書院)、同『谷間の想像力』(清文堂)の3冊が刊行された。いずれも、著者の広範な研究成果をまとめたもので、文章・談話研究の面でも、刊行を待たれていた著作である。『表現研究』第107号(2018年4月)の「表現研究関連文献紹介」に、この3冊の要を得た紹介文がある。ぜひとも参照されたい。

(甲南女子大学)